

古今和歌集考

堀内 操

I

大和時代を代表する歌集は、万葉集で、平安時代を代表するものは古今集である。大和の国は日本書紀の景行天皇17年「思^く邦^の歌^び」に「倭^{やまと}は、国^{くに}のまほらば、疊^{ただ}なづく、青垣山籠れる」とあるように青い山々にかこまれた所であった。けれども民族の成長とともに次第に狭隘を感じるようになり、より広い所ということがら山城の国に遷都したのである。ここは山紫水明の地であったから、自然的に万葉集と古今集とはそれぞれ異った地理的環境によって、その育かれた文化的性格もちがっているのである。この地理的自然的背景の相違と、もう一つは民族的発展成長の相違とを考えなければならない。従って、万葉集と、古今集とではその歌風、歌調が異なることは当然であるといわなければならない。

次に古今集は、平安文学の母胎ともいうべき存在で、古今集的なものが源氏物語に流入し、同じ山城の国に育った鎌倉室町時代の新古今集が源氏物語から流れ、でていと定説されている。近世即ち江戸時代になっては小沢蘆庵や香川景樹の如き典型的な古今派歌人がでていいる。明治時代になって正岡子規が、古今集を理窟の歌ときめつけているが、相当むりがあるように思われる。我々は素直に、その時にあった周囲の環境、時代の変遷そして民族の成長等色々な点を総合して考察すべきで、よかれあしかれ一辺倒になることは真に慎むべきである。素朴な万葉集から優雅な古今集に発展成長したその各段階における内容情趣を見分け、且つ学びたいと思う。

1 時代

第50代桓武天皇の平安奠都からこの時代が始まるわけで、景色のよい広々とした平安京を中心として、政治の実権は皇室の外戚をもって任じていた藤原氏に移り、貴族社会の文化が発達し、文学もまたこの中から興ったのである。特に仮名の創始によって、日本人の感情がよりよく表現されるようになった。中でも宮廷の侍女にすぐれた女性が選ばれたので、勢い多数の女流文学者もでたのである。

平安朝初期は文化の建設時代であって、平安京の方式をはじめ、社会制度や生活様式はすべて唐（中国で一番文化のすぐれた時代の国名）風で、自然文学も唐文学の影響を受けて漢文学が盛であった。空海、小野篁^{たかむら}、都良香^{みやこのよしか}、菅原道真等立派な学者もでており、書物も沢山できている。この頃国文学は漢文学におされて頗る衰微しており、和歌は軽うじて「読人しらず」の歌で、その命派を継いでいた。貞観時代の頃から在原業平・小野小町等六歌仙と称せられた歌の達人がで、仁和時代の頃から歌合（歌の競争）が盛に行われて、次第に和歌が宮廷や貴族社会において復興し向上して、平安文学の根源ともいべき古今集の出現となったのである。

2 名称

古今和歌集=いにしえいまの歌集の意。コキンワカシウ。我国最初の勅撰和歌集である。

3 成立

紀貫之の仮名序に「延喜5年4月18日に、大内記紀友則、御書の所のあづかり紀貫之、さきの甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門の府壬生忠岑らにおほせられて、万えふしふにいらぬ古き歌、身づからのをもたてまつらしめ給ひてなん」とあるが、この日が、歌集を撰進せよという勅を奉じた日なのか、撰進した日なのか、意見の分れる所であるが、通説としては、「奉勅の日」と見るのが穏当である。それは延喜5年以後に作られた歌即ち延喜7年と延喜13年3月の歌があるからである。それでは問題の撰進（完成奏上）の日はということになるが、これも延喜8・9年説と、13・4年説がある。ここでは奉勅の日と、完成奏上の日が一応前

古今和歌集考

者と後者とに判別したことに止め、その細部にわたっては尚今後の研究にまつこととする。

4 作者

120余人。(内訳男89人。女27人。僧10人。尼1人。計127人)但し()内の数字には色々と説があり、一定しかねている。この外に「読人しらず」の歌が431首ないし450余首あるので、ここにも相当数の作者がいる筈である。

作者を時代別に見ると一番古い作者が安倍仲麿、初期の時代が読人しらず。中期の時代が六歌仙で即ち僧正遍昭、在原業平、大伴黒主、喜撰法師、小野小町、文屋康秀。後期の時代が撰者で即ち紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑である。この外の主なる人をあげれば素性法師、伊勢、藤原敏行、清原深養父、藤原興風、古い方で小野篁等がある。

5 分類

春歌・夏歌・秋歌・冬歌・賀歌・離別歌・羈旅歌・物名歌・恋歌・哀傷歌・雑歌・雑体歌・大歌所御歌以上13に分ける。これを更に細分すると春歌上・下、夏歌、秋歌上・下、冬歌、賀歌、離別歌、羈旅歌、物名歌、恋歌 1・2・3・4・5・哀傷歌、雑歌上・下、雑体歌、大歌所御歌以上20に分ける。この外に巻頭に仮名序があり、巻末に真名序がある。特に定家の貞応本には墨滅歌もある。

6 巻数

20巻。この外に巻頭に仮名序、巻末に真名序があるのは前述の通り。

7 歌数

定家本によると1,100首。別に墨滅歌すみけしが11首あって、このうち1首は重複しているので1,110首ということになる。が墨滅歌は20巻の外にあるので古今集の歌は1,100首と見るべきである。これを更に作者によって細分して見ると、貫之102首。躬恒60首。友則46首。素性法師36首。忠岑35首。業平30首。伊勢22首。藤原敏行19首。小町18首。清原深養父17首。僧正遍昭17首。藤原興風17首で、首位は貫之。この作者による歌数は研究者によって異なるので、ここでは岩波書店の日本古典文学大系によった。歴史上で有名な方は菅原道真。

8 伝本

伝本は相当多いがその中から完本の主なものをあげてみると次の通りである。

○定家本＝藤原定家が校訂したもので、広く世に用いられた。この定家本を境として、これ以前のを古本といている。定家本も貞応2年本と嘉禄2年本が代表的であるが、貞応元年本も、伊達家本もある。

○俊成本＝俊成は父基俊から古今集の本文を受け、また新院御本をも比較し両者を取捨してできたもの。

○雅経本＝飛鳥井雅経の書写したもので、新院御本の流れである。

○清輔本＝小野皇太后宮御本の直系。

○元永本＝元永3年の写本。

II

仮名序

やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもらいずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、おとこ女のなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをも、なくさむるは哥なり。

和歌は人間の心を根源として、数々の言葉となって、生れてたのである。この世中に生きている人は、色々と沢山な事柄に関係しているので、その折、その折心に思う事を、見るもの、聞くものにつけて、歌ができるのである。花の枝でなく鶯や、水中に住んでいる蛙の声を聞いていると、およそ生あるものは何物だって歌をよまないものがあろうか。皆自然の気を感じて歌をよんでいる。和歌は別に力も入れないで、天地を感動させ、目に見えない神霊をもなる程と感じさせ、男

女の中の感情をもやわらげ、強い士の心をも、慰めてくれるものは和歌なのである。

やまとうた（大和歌）＝からうた（漢詩）に対する語で和歌の意。花になく…
…よまさりける＝天地の間に生きているものは、動物植物までがであるから、人間としてどうして歌をよまないでいられよう。との意。

以下は省略するが、順序だけを立てて見ると、この歌は天地がわかれ世界ができた時（イザナギの命・イザナミの命をさす）から作られた。この世となつてからは一番にすきのをの命の「八雲たつ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」のみそもじあまり、ひともじ。（31文字）次は仁徳天皇の「なにはづにさくやこの花冬ごもりいまははるべとさくやこの花」である。さてそれからは中国の五経の1つである詩経の大序にいわれている詩の6種の分類を取り入れて、和歌に六義（風・賦・比・興・雅・頌）ありとして列挙し、そして次に世中も変り人の心も移り、次第に年も積り、短命をかこつ折も心を慰めてくれるものは歌であると、古今集の歌を多く引例しながら説明し、万葉集の歌人を批評してはめている。さて当時において高位高官の人の歌を批評するのは軽々しくもあり、礼を失するからとして同僚ともいうべき人達を次のようにいっている。僧正遍昭は歌は上手だが誠が少ない。在原業平は花がしぼんで、その色はわからないが、ただ香だけが残っているようで、心余って、言葉が足りないといっている。文屋康秀は、言葉は功だが、歌の風体が卑しい。宇治山の僧喜撰は、言葉がかすかで、始めと、終りがたしかでない。小野小町は古のそとおり姫の流れである。あわれなるようで強くない。よい女のなやみあるににている。大伴黒主は、その様卑し。薪負える山人の花の陰に休めるが如しと評している。この外の人々には、名の知れた者が大勢いるが、自分では歌人だと思っけていても、本当の歌は知らないとい評している。

結びに、最初の勅撰和歌集の由来を述べている。1の3の成立の所に記したように、醍醐天皇延喜5年に和歌撰進の詔勅がくだり、その内容も1の6の分類の所に書いたように細々と説明してある。そうして「すべて千うた、はたまぎ（20巻）なづけてこきんわかしふといふ」と記し、更に「さゝれいしのいはほとなる

古今和歌集考

よろこびのみぞあるべき」と勅撰和歌集の喜びを記し、古今集が、後世長く伝って、失われることがないようにと願って行くのである。

古今和歌集 第1 春哥上 18首

題しらず

よみ人しらず

3 春霞たてるやいづこ みよしのの吉野の山に雪はふりつゝ

春がきたというのに、春のしるしである霞は、どこにたっているであろうか。吉野山にはまだ雪がしきりに降っている。

霞——春の代表語。み——美称。よしのの吉野——同じ語を重ねたもの。

「春だというので、春霞の棚引くのを見たいと思っている折に、吉野山には雪が降って春どころではない全く冬だと、暖い春の気持ちを打消された様子。総じて題しらず。読人しらずの歌は、平安朝初期のものである」

水のほとりに梅の花さけりけるをよめる

伊勢

44 年をへて花のかがみとなる水は ちりかゝるをやくもるといふらむ

くる春も、くる春も長い間この水は、梅の花の鏡となっているが、この水鏡が、曇るといふことがある時は、それは花びらの散りかかるのを曇るといふのであろう。

さけりけるを——咲いていたのを。年をへて——長い間たって。花のかがみ——花をうつす鏡。ちりかゝるの「散り」と鏡を曇らす「塵」とを懸詞にしている。

「作者が女性であるから、鏡をだしたあたり、いかにも繊細な趣味があらわれている」

人の家にうへたりけるさくらの、花さきはじめたりけるをみてよめる

49 ことしより春しりそむる桜花 ちるといふ事はならはざらなん

今年からはじめて春を知って花の咲く桜木。どうか散るという習慣はおぼえないでいてほしい。

うへたりけるさくらの——植えてあった桜が。春しりそむる——春を知りはじめている。ならはざら——ならわずに。習慣づけないで。なん——ほしい。と相手に望む意。

「当時は花といえば桜花。従って春——花——桜花。在原業平の歌——世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし——この世中に全く桜がなかったならば、誰も彼も春の気持が、のどかでたのしいものであろう。桜花があるばっかりに、咲くのを待ち、散るを惜しむと、心を痛めるのである。」

巻第2

春哥下

66首

題しらず

読人しらず

71 のこりなくちるぞめでたき さくら花 有りて世中はてのうければ

残りなくきれいさっぱりと散るのが結構だ桜花は。散り残っていると世中では色々な事をいわれて結局はいやな目にあう。人間も同様で、引際が大切である。何とはなしに生きながらえていると、きっと最後は憂くつらい目にあうものだから。めでたき——立派。結構の意。有りて——残って或は生きながらえて。はての——果ので、最後は。うければ——憂くつらい事だ。

「人生観的に、裏面に人間の事を十分にいおうとしたのではなく、花のことを思っているうちに自然に我が身の事も想起された花人一体という境地であろう。結論的に見ると無常観的でもあり、中国の無為自然をもととした老荘思想にも似ている。

志賀より帰りけるをうなどもの、花山に入りて、藤の花のもとにたちよりて、
帰りけるによみておくりける
僧正遍昭

119 よそにみて帰らむ人に 藤の花はひまつはれよ 枝はおるとも

よそ目にちょっと見て、(藤の花の主には何の挨拶もなく)帰るような人に、
藤の花よ、からみついて離すなよ。たとえ枝はおれても。

志賀——志賀寺。天智天皇の建立された崇徳寺のこと。をうなども——女たち。
花山——花山寺。山科の元慶寺。住職は遍昭。帰りける——藤の花を見ただけで、
仏様にお参りもせず、住職にも声をかけないで帰ってしまった。よみておくりけ
る——その女性に歌をよんで送った。よそに見て——花をちらっと見ただけで。
帰らむ人——帰るような人。はひまつはれよ——まつわりつきなさい。枝はをる
とも——よし枝は折れても、少々犠牲があっても。

「僧侶と宮女とのとりあわせで、軽い意味では主人に声もかけないで、深く
は仏様に礼拝もしないでとりたい。「はひまつはれよ」の言葉から男女関係など
ととるのは間違で、身は僧籍にあり、尚当時のものの考え方としてあたらない。」

やよひのつごもりがたに、山をこえけるに、山河より花のながれけるをよめ
る
ふかやぶ

129 花ちれる水のまにまにとめくれば 山には春もなくなりけり

花が散って流れてくる山間の小川に添って、山奥の方へ花をたずねてきたら、
奥山にはもう花も散ってしまっ、春もなくなっていたよ。

やよひのつごもりがた——3月末日。やよひ——弥生で3月。つごもり——つ
ぎこもりで30日。山を越えけるに——山越えをしてきた所が。山川——山麓やまがわの小
川。花の流れける——散った花が流れてくる。ふかやぶ——深養父と書き、枕草
子を書いた清少納言の曾祖父。花ちれる水——散った花の流れてくる川。まにま

古今和歌集考

に——従って。そって。とめくれば——求めて。たずねてきたら。山には——その奥山には。春もなく——春の代表の花がなかった。

「特別技功をこらしてもいないし、極く自然で、平淡で、逝く春を惜しむ気持がよくでている。結果は異なるが晋の陶淵明の桃花源記を想起する。」

巻第 3 夏 哥 34首

ほとゝぎすのはじめてなきけるをききて そせい

143 ほとゝぎすはつこゑきけば あぢきなくぬしさだまらぬ恋せらるはた

ほととぎすの初声を聞いた時は、又まあ、つまらなく、誰とも相手のきまらない恋がわいてくるので。

そせい——素性法師。あぢきなく——つまらなく。恋せらる——自然に恋しく思われる。はた——また。感動を込めた意。

「初夏の頃内心ほととぎすの声を待っていた。そうしたら正にないた。急に恋しさが涌いた。けれども自分自身今恋人がいるわけでもない。ああ又つまらない思いをさせられたと自然にうたったもの。」

みな月のつごもりの日よめる みつね

168 夏と秋とゆきかふ空のかよひちは かたへすゞしき風やふくらん

行く夏と来る秋とがすれちがう雲路の中では、道の片側には涼しい風が吹いているであろう。

みな月のつごもりの日——6月30日。陰暦では7月1日から秋。みつね——
おおちこうちのみつね
凡河内躬恒。かよひじ——通路。

「今日は夏の終りだという6月30日に、新しい着想を発見したという気持で、自然に素直にうたっている。そう深みはないが。」

巻第 4 秋哥上 80首

題しらず

よみ人しらず

171 わがせこが衣のすそを吹き返し うらめづらしき秋のはつかぜ

わが夫の衣のすそを吹きかえして、ああいいなあと心ひかれる秋の初風よ。

せこ——夫。わがせこが衣のすそを吹き返し——「うら」の序詞。衣の裏が見える意で、いいかけた。簡明に言うのと枕詞は五言。序詞は七言以上。うらめづらしき——「うら」は心の意。心にしみて珍しいと感じた。

「初秋の朝、女の家を去って行く男の衣のすそを吹き返した風と見るべきで、素朴な感情がでていいる。女性は自分の仕事の範囲である着物に目をつけて、裾のひるがえるのに、心を引かれ「ああ」と心を打たれた所に女性らしいやさしさが感得される。」

題しらず

僧正遍昭

226 名にめでておれるばかりぞ をみなへし 我おちにきと人にかたるな

^{をみなへし}女郎花という名に興味をもって折っただけですよ。だから女郎花よ、あなたを折ったからといって、私が墮落してしまつたと、人にいわないでおくれ。

めでて——めでは愛するの意で、気に入った。賞美して。おちにき——おちてしまった。女に手を出した。かたるな——他言するな。

「遍昭は僧籍にある身であるから、名前が気に入って折り取ったにしても、女郎花と書いて女の字が一番上にでている。草体も花もやさしいので、それを賞美して折るには折ったが、女という字がある故、女に手を出したなどと誤解されてはたまらないという気持が現れている。やや理窟ばいかと思う。」

ふちばかまをよみて人につかはしける

つらゆき

240 やどりせし人のかたみか ふちばかまわすれがたきかになほひつつ

私の所にお泊りになったあなたの形見であるか藤袴は、あなたの事が忘れられないように香って、自然とあなたを思い出してしまうので。

藤袴——秋の七草の一。やどりせし——泊った。かたみ——記念。

「藤袴の香を、一夜泊って行った人の残した形見の香のように感じて深い愛着をもっているのである。誠に折もよし秋の藤袴の咲いている季節。泊った人を尚親しく思っこの歌を作って届けたのである。自然で愛情の籠った歌。藤袴の香を賞して作ったというのは当らない。」

巻第 5

秋哥下

65首

是貞のみこの家の哥合によめる

たゞみね

263 雨ふればかさとり山のもみちばは 行きかふ人の袖さへぞてる

笠取山の紅葉は、時雨の為一段と色がさえて、そこを通る人の袖までが照り映えて見える。

雨ふれば——笠取の枕詞。だが歌の意は間接的に時雨を思わせている。笠取山——京都府宇治郡の山。袖さへぞてる——袖まで照りはえている。

「雨が降るので、笠を取ると言いかけ、更に紅葉が雨にぬれて一段と光彩を放っている感がある。従って、そこを行ききする人の袖も紅葉の美しさで、更に綺麗であるとうたいあげている。」

宮仕へ久しう仕うまつらで山里にこもり侍りけるによめる

藤原関雄

282 奥山のいはかきもみぢちりぬべし てる日の光みる時なくて

古今和歌集考

奥山の岩が垣のようにめぐらしている中の紅葉は、もう散ってしまったであろう。日光に当ることもなく、むなしくまあ。

宮仕へ久しう仕うまつらで——宮仕えを長い事しないで。山里——田舎。

「作者の心境を岩垣紅葉に託してうたったものと思われる。自分は田舎にのみいて宮仕えすることもなく、このまま朽ち果ててしまうことであろうと、あきらめの気持が濃い。」

寛平の御時古き歌たてまつれと仰せられければ、竜田川もみちばながるといふ歌をかきて、その同じ心をよめりける
おきかせ

310 み山よりおちくる水の色みてぞ 秋はかぎりと思ひしりぬる

深山からどんとどんと流れてくる水の色（紅葉が散って浮いているので赤色）を見て、もう秋はおしまいでであるとよくよく思い知ったことである。

寛平——年号。竜田川もみちば流るの歌——284 たつた川もみちばながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし。同じ心——同じ風情。み山——「み」は美称で接頭語。だがここでは深山即ち奥山の意。おちくる——水の流れ。紅葉の散るにも縁がある。

「水の色が重点で、一杯に散った紅葉が流れてくるのであるから真赤である。前掲の古歌に「もみちば流る」とでているので、水の色で、もう秋は最後であるという感じが十分に含まれている。」

巻第 6 冬哥 29首

むめの花にゆきのふれるをよめる

小野たかむら朝臣

335 花の色は雪にまじりてみえずとも かをだににほへ人のしるべく

梅の花が咲いている時に雪が降ったので、白色の梅花は雪と一緒にあって見え

古今和歌集考

なくなってしまったが、梅花の香だけでもにおわせなさいよ。梅がここにあると人が知るように。

小野篁——漢学者。然し歌人でもあった。朝臣——八色の姓の一つ。姓の下、名前の下につくことによって位が異なる。まじりて——梅花の白と雪の白とが一緒になって。か——梅花の香。人のしるべく——人が梅花の存在を知るように。

「季節はずれの雪で、ちょっと困却した有様。然し香だけは雪にはないから梅花よ特性を発揮して、存在を示しなさいと稍、理詰め感がある。春の夜のやみはあやなし梅花色こそみえねかやはかくる。の凡河内躬恒の歌の筋を引いている。」

巻第 7 賀 哥 22首

題しらず

読人しらず

343 わがきみは千世にやちよに さゞれいしはいはほとなりてこけのむすま
で

あなたは千年も万年も元気に栄えてもらって、いわば細石が次第に成長して、巖となり、その巖に苔が真青に生えるまで長寿であってもらいたい。

賀——祝い。60の賀。70賀。きみ——広く用いた言葉で、天皇をさすとは限らない。顕昭註には「君が代」とでている。

「限りない年数を現実的に表現し、雄大無限の調べを作っている。初句の五字に意見があるならば「我が国は」でも「この世をば」でもよく。悠久に続く平和の姿をうたい、こいねがっているのではあるまいか。」

巻第 8 離別 哥 41首

源のさねがつくしへゆあみむとてまかりける時に、山さぎにてわかれおしみ
ける所にてよめる

しろめ

387 命だに心になふ物ならば なにかわかれのかなしからまし

せめて命だけが思うようになるものならば、どうして、別れることが悲しうございましょう。（だが、命は思うままにならない。老少不定の世の中で、それで別れが悲しいのであるという裏面の意。）

源のさね——源実。つくし——九州。湯あみむとて——温泉で湯治をしようとして。しろめ——遊女白女。歌の上手者。心になふ——思い通りになる。

「素朴で、かざりも、理窟もなく、真情を吐露している。旅に立つ人に対し、離別の情がにじみでている。」

巻第 9 羈旅哥 16首

あづまの方より京へまうでくとて、みちにてよめる おと

413 山かくすはるのかすみぞうらめしき いづれ宮このさかひなるらん

都のあたりの見当をつける山が、春霞でかくされて見えないのがうらめしい。いったいどの辺が都のあたりなのだろう。

まうでく——上ってくる。おと——^{みぶの}壬生乙。壬生のよしなりの娘。いづれ宮この——どこが都の。

「東国から都恋しさでのほってきた。その喜びと、さあ都はあの辺だと目標になる山が、あいにく春霞にかくされてうらめしいと、喜びが、悲しみで中止された気持を素直にうたいだしている。」

巻第10 物名哥 47首

たちばな

しげかげ
小野滋蔭

430 あしひきの山たちはなれゆくくもの やどりさだめぬ世にこそありけれ
風のために、今まで山にかかっていた雲が、山から立って離れていくように、
どこと宿のきまらないこの世の中であるよ。

あしひきの——山の枕詞。山たちはなれ——山から雲が立って離れていくとい
いながら「たちばな」をおりこんでいる。

「たちばなという物の名前をうまくうたいこみながら、この世の中の無常を表
現している。」

からはぎ

読人しらず

448 ^{うつせみ}空蟬のからは木ごとにとむれど たまのゆくへをみぬぞかなしき

蟬のぬけがらは木ごとに残っているが、その魂のゆくえは、どこであるかわか
らないのが悲しい。（人も遺骸は棺の中に残っているが、魂の行くえはわからな
い。）

からはぎ——萩。うつせみ——現身。空蟬とも書き、蟬のぬけがら。又世・人
・命の枕詞になることもある。からはぎをいいこんでいる。たまのゆくへを——
魂のゆくえを。死後肉体はなくなっても魂は存在している。靈魂不滅の考え方。
見ぬぞ悲しき——見ないのが悲しい。

「人生の悲哀を含めながら、現実を肯定して、あきらめを示している。」

巻第11

恋哥 1

83首

題しらず

読人しらず

469 ほととぎすなくやさ月のあやめぐさ あやめもしらぬこひもするかな
ほととぎすのなく5月。その5月の端午の節句に軒にさすあやめ。そのあやめ
と同音のあやめも知らぬ即ち物事の筋も知らない夢中な恋をすることである。

古今和歌集考

ほととぎすからあやめぐさまでの上三句は、あやめもしらぬの序詞。序詞は次を引出すために直接意味はない。あやめもしらぬ——思い乱れて物の見境もつかない。恋もするかな——そんな恋もすることか。自分ながら怪しむ心持。

「季節は初夏。空にはほととぎす。軒場には菖蒲のよい香り。情緒が濃厚で、そぞろに悩ましい。自然と人を恋しく、恋をせずにはいられないようにうたいぬいている。」

題しらず

凡河内躬恒

481 ^{はつかり}初雁のはつかに声を聞きしより なかぞらにのみ物を思ふかな

わずかに（ほんの一言）あなたの声を聞いて以来、私の心はうわのそらで物思いをし、あこがれてちょっとも落着かないことですよ。

初雁の——はつかの枕詞。なかぞらにのみ——中空にただよう雲のようで。心が落着かない。うわの空。

「一声きいただけですっかり心をうばわれてしまった。初恋の新鮮さと、強力がよくでている。恋心をすらしとうたいだしている。」

巻第12

恋哥 2

64首

題しらず

小野小町

552 思ひつゝぬればや人のみえつらん 夢としりせばさめざらましを

恋しく思う人を思いながら寝たからだろうか、夢の中で、その思う人が現れたのであろう。それが夢とわかっていたら、さめないで夢のままにいたかったのになあ。

思ひつゝぬればや——思いながら寝たからだろうか。人の見えつらん——その人が夢の中に現れたのであろう。

古今和歌集考

「小野小町は美人の称は高いが、悲恋の女性か。はかない夢のさめた哀愁が浮堀にされている。技巧繊細という古今調的に考えると誇調が過ぎるように思う。」

寛平御時きさいの宮の哥合のうた、

紀とものり

562 夕されば螢よりけにもゆれども ひかりみねばや人のつれなさ

夕方になると、螢よりもまさって私の胸のうちが燃えるけれども、螢の光とはちがって、心のひかりで表に見えなかったからなのであろうか、相手の方は全然無情である。

けに——まさって。みねばや——ねは打消の助動詞の已然形。それに「ば」がついたのだから確定的。

「自分の熱情が相手に通じない有様を説明したもの。」

巻第13

恋哥 3

61首

やよひのついたちより、しのびに人にもものらひてのちに、雨のそほふりける
によみてつかはしける

在原業平朝臣

616 おきもせずねもせでよるをあかしては 春の物とてながめくらしつ

恋に悩まされて起きるでもなく、寝るでもなく、悶々として寝返りをしながら夜をあかし、昼は昼で、長雨のしとしと降る中を一日中物思いにふけて暮してしまった。

しのびに人にもものらひて——内密に女と恋を語り合って。春の物とて——長雨。物思いの雨の意。長雨——眺め。

「悶々の情を日常語を用いてよく表現し、長雨の続く春の日を恋になやみ思い続けた切ない気持がよくうたわれている。」

題しらず

おののこまち

635 秋の夜も名のみなりけり あふといへば事ぞともなくあけぬるものを
秋の夜長というのも名ばかりである。思う人と逢ったかと思ううちに、何の事もなく夜があけてしまったのに。

名のみなり——名ばかり。あふといへば——あっていると。事ぞともなく——何という事もなく。

「恋心であると時間の経過が何とも早い。秋の夜長も決して長いとは思えないの心。」

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

きのともりの

661 ^{くれぬ}紅の色にはいでじ かくれぬのしたにかよひて恋はしぬとも

2人の仲は表情にはだすまい。人目につかないように心の中だけで思い合っていて、そのために恋い死にするような事になろうとも。

紅の——序詞。かくれぬの——下の枕詞。下に通いて——心の中で思い合って。恋ひは死ぬとも——恋した結果死に至るとも。

「既に愛は成立し、信頼し合っている仲。従って表にはださないように。これ程まで理解し合っている間で、恋こがれて死ぬようだったら本望だと大胆に言い切っている。純潔で頼もしい恋仲の歌。」

巻第14

恋哥 4

70首

人をしのびにあひ知りて、逢ひ難くありければ、その家のあたりをまかりありきけるをりに、雁の鳴くを聞きてよみてつかはしける 大伴のくろぬし

735 思ひいでてこひしき時は はつかりのなきてわたると 人しるらめや
あなたを思い出して恋しい時は、私も泣きながらあなたの家のあたりを歩いて

いる。このような切ない気持をあなたは知って下さっていたでしょうか。多分おわかりにならないでしょう。

詞書の訳——女の人をひそかに相知りながら、逢いにくかったので、その家のあたりを歩き廻った時に、雁の鳴くのをきいて、よんでやった歌。初雁の——鳴く枕詞。人しるらめや——反語で、たぶん知らないだろう。

「恋の苦勞の程をしみじみと表現した情の深い歌である。」

おやのまもりける人のむすめに、いとしのびにあひてもものらひけるあひだに、
おやのよぶといひければ、いそぎかへるとて、もをなんぬぎおきていりにけ
る。そののちもをかへすとてよめる おきかせ

745 あふまでのかたみとてこそとどめけめ 涙にうかぶもくづなりけり

又会うまでの形見と違って残したのであろうが、私としてはこの裳を見るのが涙の種で、いわば涙の海に浮ぶ藻屑でしたよ。

裳——女の礼装の時、腰の後にまとったもの。

「親が大切にしていた娘と、しのんで話合っていた時、侍女が親が呼んでいるといわれたので、急いで帰って裳を忘れていってしまった。そこで作者は裳を持ち帰ったのであるが、この裳を見る度に娘を思い出し涙が流れて仕方がない。後に裳を返す時に送った歌で初恋というか、一目見初めたその心が恋ともえ上り、しかも忘れ形見に裳が残された。どうしても忘れられないと、恋心をうたった強烈なもの。」

巻第15

恋哥 5

82首

題しらず

読人しらず

772 こめやとは思ふ物から ひぐらしのなくゆふぐれはたちまたれつゝ

古今和歌集考

あの方はきてくれるであろうか、いやきはしない。と思いながらも、ひぐらしのなく夕暮時になるといつも外に立って待たずにはいられない。

こめや——こは、ら変動詞の未然形。めは、未来の推量をあらわす「む」の已然形。やは疑問の助詞で反語となる。

「思い切りながらも、何かその心を引立てるものがあれば火と燃える。これ人情の機微か。従って何事も客観的に物事を思考することが大切である。」

こゝちそこなへりけるころ、あひしりて待ちける人のとはで、こゝちおこたりて後、とぶらへりければ、よみてつかはしける 兵衛

789 しでの山ふもとをみてぞかへりにし つらき人よりまづこえじとて

私は死にかけたが、死出の山の麓をただで帰って来てしまった。薄情なあなたより先には越えまいと思って。

こゝちそこなへりける——病気していた。とはで——見舞にこないで。こゝちおこたりて——病気がよくなって。とぶらへりけれ——見舞にきた。死出の山——冥途にある山。

「薄情とか、義理でとか、真情のこもらない現代的な人間性の薄い事は今も昔もかわらない。どうせ死ぬならと知らぬふりをしていたが、快方に向ったときいで急いで参上した。作者は女性で藤原高経朝臣の女^{むすめ}。死出の山は先には越えない。一緒に越えると女性らしさをあらわしている。」

寛平御時きさいの宮の哥合哥

すがののたゝをむ

809 つれなきを今はこひじとおもへども こゝろよはくもおつる涙か

あれ程薄情だった人だから、今はもう恋すまいと思うけれども、心弱く何となく涙が流れて、仕方ないことであるよ。

つれなきを——つれない人を。か——詠嘆終助詞

古今和歌集考

「人対人の真情から考えると、このような心情が、人間の底のものを捉えているように思われる。こころ弱さが真心か。」

巻第16 哀傷哥 34首

紀の友則が身まかりける時よめる

貫之

838 あすしらぬ我身とおもへど くれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

あすの命もわからない私の身の上であると思うけれども、暮れない今日はまだ私の命があるので、なくなった人（友則）のことが悲しいことであるよ。

身まかりにける——死んでしまった。くれぬまのけふ——明日になるまでの今日。

「明日さえわからない我身ながら、生きている今、共に古今集を撰した親しい友の死にあって、今更の如くこの世のはかなさを痛感し、友則の死を我事の如く嘆き悲しんでいる様うかがえる。」

巻第17 雑哥上 70首

題しらず

業平朝臣

879 おほかたは月をもめでじ これぞこのつもれば人のおいとなるもの

通り一ぺんに軽々しくは月を眺めまい。この月を眺めることが積っていくと、結局人のおい即ち老人になってしまうからなあ。

^{おほかた}大方——だいたい。一般的。これぞ——月を賞美すること。この——これが。月——空の月と年月の月をかけている。月の経過は老人。

「時は絶えず過ぎて行く。従って無為に時を過して後悔しても無駄である。着実な一瞬一瞬を考えながら、人生を真剣に生きて行こうとする気持がうかがえる。」

無常観からくるその時その時の大切さを詠ったもの。吉田兼好の徒然草にも「ある人弓射ることを習ふに」の段で「何ぞたゞ今の一念において、直ちにすることの甚だ難き」といっている。」

相知れりける人の住吉に詣でけるによみてつかはしける みぶのたゞみね

917 住吉とあまはつぐともながみすな 人忘草おふといふなり

ここは住吉といって住みよい所だと海人はいっても、あなたは住吉に長居をなさらないように。なぜならばここには人を忘れるという忘草が生育しているという事だから。忘草の為に私が忘れられては困るので。

相知れりける人——恋人。住吉——地名と住みよいとをかけている。海人——漁人。ながる——長く住む。人忘草——植物名。人を忘れるにかかる。生ふ——生育している。

「地名と植物名とを懸詞にして、我が恋人よ、私を忘れないで下さいと恋慕の情を訴えたもの。素朴のうちに熱情の程がうかがえる。」

巻第18

雑哥下

68首

時なりける人の、にはかに時なくなりてなげくをみて、みづからの、なげきもなく、よろこびもなきことを思ひてよめる 清原ふかやぶ

967 光なき谷には春もよそなれば さきてとくちるもの思ひもなし

太陽の光のささない谷間では、花の咲く春も縁がないから、花の咲くのも、特に早く散って惜しいという嘆きもまるでない。

時なりける人——君の御寵愛を得て栄えている人。みづからの——作者自身。

「作者の生活環境から名利を捨て、悟道にいった心境をうたったものか。然しその喜び、嘆きは他人事のようにいいながらも、心の底には世情の寂しさをしみ

じみと感じている。」

家をうりてよめる

伊勢

990 あすかがは ふちにもあらぬ我やどもせにかはり行く物にぞ有りける
飛鳥川の淵でもない我宿も、まるでその淵のように瀬にかわってゆくものよ
うであるよ。

933 世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせとなる」をふ
まいてうたったもの。せに——^{ぜに}錢。

「自分の家をうって、変化の激しさを知り、無常観が、あすか川の流れの変化
のはげしさに表現されているように、無常を感じた作。」

巻第19 雑歌 68首

せ どう か
旋 頭 歌

題しらず

つらゆき

1010 きみがさすみかさの山のもみぢばのいろ かみな月しぐれの雨のそめる
なりけり

み笠山の紅葉の色は、十月のしぐれの雨が染めたのであるよ。

旋頭歌——短歌が五句であるのに対して、これは六句を特徴とする。きみがさ
す——み笠の枕詞。神な月——陰暦10月。時雨の季節である。

「陰暦10月（神無月）は時雨の時で、そのしぐれがしみこんで紅葉したのだと
いう自然のなりゆきをうたったもの。」

巻第20 大哥所御歌 32首

大伴くろぬし

1086 あふみのやかがみの山をたてたればかねてぞみゆる きみがちとせは

これは今上の御へのあふみのうた。

近江の国に鏡山がある。その名前の通りに、その鏡に前々からうつっている君の千歳は。即ち君がいついつまでもお栄えになり、国が栄えることが。

大哥所——宮中図書寮の東にある。正月の節会。新嘗祭など公儀に用いる歌の教習、管理に当る役所。や——間投助詞。たてたれば——鏡は台をおいてその上にたてるから。かねて——予てで、あらかじめ、前もって。ちとせ——千歳。千年。永遠。今上——醍醐天皇。御ベ——おほんにへで、大嘗祭のこと。天皇即位後最初の^{にいなめさい}新嘗祭のこと。新嘗祭とは天皇がその年の新穀を天神、地祇にすすめるお祭。

「近江の鏡山の鏡には君の千歳がうつっていると、天皇をお祝した歌で、醍醐天皇は寛平9年7月即位しているので、大嘗祭はその11月に行われたと思われる。そしてこの頃は悠久の国は近江を用いるのが例であった。又作者大伴黒主もあやしく後のしわざとの説もあるが巻第17の899の歌で読人しらずも、鏡山に関する歌で、大伴黒主の歌也ともでている。要するに君の弥栄、国の繁盛をいつまでもとこいねがった歌。」

III

古今集は紀貫之の仮名序をはじめとして、20巻。1,100首の歌。更に墨滅歌が巻第10に5首。巻第11に2首。巻第13に2首。巻第14に2首計11首ある。最後に紀淑望の真名序で終わっている。

古今和歌集考

万葉歌人大伴家持以後の和歌は誠に寂しいもので、世はあげて唐風、漢詩文全盛の時代であった。然しこの間も民間伝承的に読人しらずの歌人によって歌の命は続けられた。漢詩文の作者でありながら和歌を作った人は小野篁、藤原関雄、菅原道真、大江千里等である。六歌仙の時代になると、和歌が次第に盛になった時代であるが、作者達は何れも悲劇的な背景をもっていた。和歌の全盛時代を生み出したのは「歌合」である。「寛平の御時きさひの宮の歌合」からは、此集に載せられた歌が56首もある。なんといっても撰者時代の歌が一番多い。

古今集巻第 1 春哥上

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

1 年の内に春はきにけり ひととせをこそとやいはん ことしとやいはん

春たちけるは立春で、立春がきたからふるとしといったまでで、今年のことである。その今年の年の内に立春がきてしまったので詠んだ歌という意味。

年内に立春になってしまった。さて、この年を立春がきたことからいうと、もう正月なのだから去年というより仕方がない。けれども、大晦日も勿論元旦もまだこないのだからその意味では今年というよりほかにない。さあ、去年といおうか、今年といおうかと、理窟にひっかかってとまどったところ。

この歌などから古今集の歌は「ことわり」の歌との評が多い。藤原俊成も「まことに理つよく、又おかしくきこへありがたくよめる歌」といつているが、正岡子規は万葉集をほめるの余り、古今集は理窟の歌であるときめつけている。なる程古今の風情は理窟にたよって構成され人間感情の率直な表現は少ない。けれども「理つよし」の外に「をかし」「ありがたし」の面も忘れてはならないと思う。

寛平・延喜時代の歌人が古今集の中堅で、これ等の人達は自分の感情を素直に発表する明朗さを欠き、内部の憂うつを歌に表現して自己が解放され、満足されたであろうから、ここに抒情歌としての古今集が生れたのである。

古今和歌集考

古今集の表現は写生的でもなく、人生的でもない。又正面から見ることを避けて側面から見るが多く、物そのものを直接的に見るよりも、他のものをかりて表現している。これは自己の内にある憂うつ（作者について見ると、小野篁の穩岐、在原行平の須磨に流されたこと。遍昭の出家。業平の好色。小野小町の不安定さ等）が外の色々なものとかかわりあって詩情をわかし、それをなるべく正しく表現しようとする。ここに理窟と技巧が自から必要になってきて、結果的には理窟の歌と見られるようになってしまったものと思う。然し理詰めで情緒がないなどとはいえない。情意的擬人法が多く取り入れられていること。疑問、推量、願望をいいあらわす詞が多く用いられている点から見ても。

万葉集を「ますらをぶり」男性的。古今集を「たをやめぶり」女性的とし、又万葉集を素朴。古今集を優雅と見ている。なんといっても平安時代における貴族社会のその文学を生み出すもととなった古今集であるから一般的にいう優美繊細がこの集の特徴である。

尚貫之の仮名序は文学論の最初のものである。

安倍仲磨の歌は巻第9 羈旅 406 に。菅原道真の歌は同じく 420 にある。

補

なるべく、いままで教材として諸本に載せられている歌はさけるようにしたこと。又同じ作者の歌を重ねないように努力した。そしてよりよい歌をと心がけた。